博士（工　学）　小　澤　丈　夫

学位論文題名

1990年代以降のオランダ建築における設計思想と手法に関する研究

学位論文内容の要旨

オランダでは、1990 年前後を境に国土計画と住宅供給に関する政策の抜本的な転換が行われ、これが景気の向上と連動したことによって建築市場が活性化した。これ以降、オランダにおける建築家の設計活動は、質と量の両面で大きく変化し、その動向が世界的に注目を浴びるようになった。日本においても、専門誌、展覧会、講演会などを通じて、現代のオランダ建築家の活動が広く紹介され、これが建築家や学生に与えた影響は少なくないと思われる。しかしながら、建築家や作品を個別に紹介した事例は多いが、オランダの時代背景を踏まえながら全体の動向を俯瞰的に研究した例は少ない。一方、現代の日本では、90 年代以降の景気後退と回復、あらゆる分野で構造改革が求められる大きな変化の中で、建築家のとるべきスタンスや手法について十分な議論がなされているとはいえない。

本研究は、第 1 章で、まず 90 年代以降のオランダ建築に見られる設計思想を立体的に理解するために、オランダの建築家の問題意識の所在、スタンス、表現手法についての傾向と特徴を全体の背景の中で明らかにし、さらに、オランダと日本において行った自らの設計事例の考え方を整理することによって、オランダの設計思想をベースにした新たな建築設計の展開の可能性について探ることを目的としている。

第 2 章では、90 年代に至るまでのオランダの住宅政策と建築家の活動について、以下の流れがあったことについて明らかにした。

大戦後の復興を経て、オランダは 60 年代には充実した福祉社会を築き上げた。この間、建築家は政府の供給する賃貸ハウジング、高齢者施設などを中心に、戦前から続くモダニズムの伝統をオランダ独自の形で発展させた。しかし、70 年代以降、急速な民主化、石油危機による経済停滞、財政赤字などの事態を迎え、福祉国家政策への批判が高まった。さらに 80 年代に入り、グローバル化、個別化、オランダの過密状況などへの対応を迫られ、政府は 90 年代にかけて住宅政策を市場に委ねることや、新しい国土開発のビジョンを示した第 4 次国土計画を策定するなど抜本的な方針転換を図った。この時期、建築家や批評家から、従来のモダニズム建築のあり方に対して、矛盾や閉塞感が指摘された。しかし、多くの建築家にとって、形骸化したモダニズムの考え方を転換することは容易ではなく、80 年代を通じて米国を中心に広まったポストモダニズムやデコンストラクションへの積極的な傾倒も、オランダにおいては認められなかった。一方で、80 年代半ば、OMA、MECANOO など、新しい先鋭的な建築家による設計活動、言論活動が開始され、新しいオランダ現代建築の源流が生まれた。

第 3 章では、オランダ建築研究所発行のオランダ建築年鑑に掲載されている建築作品と論文を分析した。

まず 1990 年以降の全掲載作品約 450 件について、建物用途、所在地、設計者別に分類し全体の傾向を明らかにした。次に年次別の特徴を分析した結果、90 年以降大きく以下の 4 期の展開があることが明らかになった。

第 1 期（1990 年～93 年）

80 年代から続くモダニズムとは何かという議論が根強い時期である。context や urban form などのキーワードを用い、80 年代の議論の延長で建築が語られている一方で、第 4 次国土計画を受けて、各地で住居地域開発のマスタープランが発表され、建築家が個々の住居の快適性に対して、改めて積極的に取り組む姿勢が認められた。一方、OMA, MECANOO, VAN BERKEL など 80 年代を通じて、MIES の引用、ディテール、材料、彫刻的な形態など、モダニズムに対して独自の解釈とアプローチを試みてきた建築家の作品が相次いで竣工した。

第 2 期（1994 年～97 年）

第 4 次国土計画改訂版（VINEX）の発表を受け、住宅、建設市場が活況を見せ始める。開発によって都市の境界が曖昧になり、欧州全体の中でのオランダ各都市の位置づけが意識され、international, metropolis などのキーワードが用いられる。VINEX により指定された郊外地域や既存市街地では、大型のプロジェクトが相次いで進められる。建築家の活動もハウジングだけではなく、文化施設、橋や駅などのインフラ施設、個人住宅など多岐に渡り、材料、ディテール、形態表現などの面で多様性を見せるようになり、若手建築家の台頭も著しくなる。

第 3 期（1998 年～2000 年）

市場の優位性が高まり、market, consumers, media などの用語が、議論の前面に用いられる。様々なデザイン言語が引用され、建築の表現が多様になっていく傾向が顕著になる一方で、これに対する疑問が投げかけられる時期でもある。MVRDV や OMA など先鋭的な建築家は、オランダの向かう方向を客観的に分析し、建築家として新たな活動の範囲を広げるための大胆で実験的な提案を行う。

第 4 期（2000 年～03 年）

VINEX が根拠としていた人口の増加が、予想を大きく下回ることが明らかになり、市場の勢いに陰りが見られる。90 年代後半の建築家の活動が広く認知され、建築作品や建築家が、catalog、propaganda などのキーワードで語られる。一方で、一般消費者より建築家のつくる大胆で特異な建築に対する違和感が唱えられ、次第に reality, regionalism などのキーワードで語られる建築が増える傾向が見られる。新たな若手建築家達による、施主や敷地などの状況を丁寧に読み込んだ小規模な作品が多く実現される。

第 4 章では、筆者がオランダで設計活動を行っていた 93 年から 98 年の期間の設計思想をベースとした、active field of housing （ベルラーヘ建築研究所におけるプロジェクト）及び実施作品（HERTZBERGER 事務所及び自らの事務所 による日本における建築作品）についての考察を行った。

active field of housing では、都市が居住するためのものであること、ハウジングが都市をつくる上での骨格であるべきことを前提に、具体的なハウジングと住宅プロジェクトを通じて、ハウジングへの設計アプローチについて、何をよりどころに考えればよいかについて考察した。実施作品においては、オランダとは異なった日本の状況において、オランダの設計思想をベースにした手法をどのように展開できるかについての試みと考察を行った。

第 5 章では、以上の考察を通したまとめを試みた。

90 年代以降のオランダ建築には、現代において類をみない劇的な変化を認めることができ、本研究ではその背景や変化の過程と傾向を明らかにした。これによって、近年、断片的に紹介されていたオ

ランダ建築家の設計思想や手法について、個々の位置づけや課題を立体的にとらえることができた。そして、90 年代以降のオランダ建築の特殊性と現代性について考察することによって、これからますますグローバル化が進み、建築を広い枠組みの中で捉えることが要求される現代において、今後の建築設計の可能性に対して示唆を得た。さらに、自らの 90 年代のオランダの建築思想をベースにした設計手法について考察したことは、日本における設計の展開方法において、ひとつの方向性を示唆することになると思われる。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　角　　幸　博

副　査　　教　授　　奥　　俊　信

副　査　　教　授　　小　林　英　嗣

副　査　　教　授　　野　口　孝　博

学　位　論　文　題　名

1990年代以降のオランダ建築における設計思想と手法に関する研究

20世紀におけるオランダの都市計画と近代建築が，世界的に注目されてきたことは広く知られ，また，干拓と治水により国土を獲得してきた長い歴史，20世紀初頭より開花したモダニズム建築の実績，戦後のモダニズムの独自な展開など，21世紀の都市と建築と技術のあり方を考えていく上で，他国に例を見ないユニークな考え方や多くの事例を見ることができる。さらに，近年のオランダ建築は，1990年前後を境に大きな転機を迎え，国土計画と住宅供給に関する政策の転換が行われ，景気の向上と連動して建築市場が活性化した。建築家の設計活動は，質と量の両面で変化し，その動向が再び世界的注目を浴びるようになった。これまで，オランダ建築について，建築家や作品を個別に紹介した事例は多いものの，オランダの時代背景を踏まえながら全体を俯瞰的に研究し，設計手法の展開について踏み込んで分析した研究は見られない。

論文は，５章で構成され，第1章では研究の目的と背景にふれ，第2章で，オランダ建築の動向を建築学的立場から記録している『オランダ建築年鑑』（オランダ建築研究所発刊）を主な分析対象とし，1990年以降のオランダ建築年鑑掲載の論文にみられる設計思想の分析，第３章で，同年鑑に掲載のハウジングと住宅作品について設計手法を分析し，その結果90年代以降の議論を，概ね以下の4期に分けて整理し，さらに各期において議論された内容に対して，オランダ建築家の実践的手法の提案を明らかにしている。

第1期(1990～1993)では，従来のモダニズム手法の有効性が根本から問い直され，第2期(1994～1997)で，多くの大型再開発プロジェクトが動き，新しい世代の建築家による大胆な試みが注目され，インターナショナルな視点からオランダ建築の本質を問う考察がおこなわれた。第3期(1998～2000)では，グローバル化や消費社会の到来により不透明になった建築の先行きについて議論が行われ，第4期(2001～2003)で，景気の後退や市場の優位性が高まり，建築の意義について問う議論が行われたことを明らかにした。

第2章と第3章の解析の結果，90年代以降の新しい変化に対して，“自然現象を制御しようとする思想”，“合理的にものごとを考えようとする思想”，“合意形成をとる思想”，“トータルにものを考える思想”が，具体的な手法を伴いながら投影されていたことを指摘し，さらに，これら４つの思想を“建築におけるオランダモデル”として定義している。

第4章では，この“建築におけるオランダモデル”を一般化し適応するために，著者がオランダのベルラーヘ研究所で行ったハウジング研究とオランダおよび日本で実施の設計作品に対して，建物の背景や状況の理解，制御しようとする対象の明確な位置づけ，既存の枠組みに捕らわれない合理的で実践的な手法の提案，などの面から設計手法の妥当性を検討している。

第5章では，以上の検討を通じて，“建築におけるオランダモデル”を思想の基盤におくことによって，既存の考え方にとらわれることなく、様々な社会変化に応じて建築の枠組みを広い視野から柔軟

にとらえ直すことによって，合理的、横断的に考えられた設計手法を実践する態度が身につくこと、このような態度によって、これからの都市や建築に求められるパラダイムの変換に対応できる可能性が開けること，そこから多様な方向性をもった新しい設計手法が展開できる可能性が生まれること，引き続きオランダ建築の対応手法の観察が，今後も多くの示唆を与えてくれることを指摘している。

これを要するに，著者は，1990年代以降のオランダ建築における設計思想と手法を基盤とした設計手法に対して，実施設計事例においてその可能性を検討し，オランダモデルを思想の基盤に置くことによって，これからの都市や建築に求められるパラダイムの変換に対応できる可能性が開けること，そこから多様な方向性をもった新しい設計手法の展開の可能性が生まれるという新知見を指摘したものであり，建築設計学，建築デザイン学，建築計画学，都市計画学に対して貢献するところ大なるものがある。よって著者は，北海道大学博士（工学）の学位を授与される資格あるものと認める。